

里川研究掲示板

当センターでは、「里川」というコンセプトについて研究活動をしています
このコーナーでは、活動動向を随時お知らせしてまいります

「里川とは何か」

ミツカン水の文化センターでは、2004年度より共同研究「里川」を開始いたしました。3年程度の期間を見据えて活動に取り組めますが、初年度はテーマを「里川とは何か」とし、里川についての概念設計を行います。今回は、共同研究「里川」の趣旨と今年度のテーマ群をご報告します。

1. 共同研究「里川」の趣旨

1. 里川を研究する理由と思い

本研究の目的は「里川」という言葉で、「人々が協力して川を守りつづける」というさまざまな形を解き明かすことにあります（ここでいう「川」は、自然の川だけではなく、用水、水路、運河、さらには給排水路などの人工の流れも含めます）。

歴史を振り返れば、川は常に人々の協力の下に守られてきました。また、「人々」の意味するものが、比較的狭い地域に住む人々を意味するときもあれば、何十万・何百万人という人々を指す場合もありました。後者の場合は限られた地域組織では守れないと思われたために、国や自治体等が川を公共財として管理し守ってきた歴史があります。高度成長期を経て、私たちの暮らしは常識的な意味では豊かになったといえるでしょう。

しかし高度成長の時代が終わった現在、当センターでは「人々が協力して川を守り続ける」上で、2つの課題が発生していると考えています。

第1は、守ることの前提にあった水に対する感覚が忘れられようとしていることです。

現代の日本人は、一見、豊富な水に取り囲まれ、水から多大な恩恵を受けています。水を供給する堅牢な技術の上に私

たちの暮らしは成り立っており、私たちもそのような条件を前提に暮らしています。このため、水を守るうとする出発点にはあった、水が本来的にもつ怖さ・危うさや、水の持つ恵み等の意識を、いつの間にか感じなくても済むようになってしまっています。

第2は、水と暮らしの間に社会的ジレンマが発生していることです。

飲み水の量や質、不安定な食糧生産、気候変動、等々、水が主要な変動要因となつているさまざまな自然・社会現象により、暮らしそのものが揺らぎ始めています。しかし、一方でかなりの生活者が、上下水道、住宅、土木技術など多くの技術が可能にする快適な暮らしは続けていきたいという気持ちを持っています。さらには、生き物の言い分（生態系の維持）というものも、考慮に入れた方が望ましいとも思っています。

快適な暮らしを享受しながらも、暮らしにおいて水が持つ「危うさ」を直視しようとする、その快適な暮らしが脅かされかねないわけで、まさに暮らしと水利用の間に、「あちらを立てば、こちら立たず」という社会的なジレンマがあるわけです。

いま必要なのは、暮らしの現場に立ち、ジレンマを生む構造そのものを明確にして、その検討を踏まえ「水を協力して守り続ける」方法を開発しなければならぬということです。

2. 問題の所在

「水を協力して守りつづける」上で、その道筋が一番見えないのは都市部です。都市部（郊外も含む）は、水感覚の喪失と「水利用と暮らしのジレンマ」がもっとも先鋭的に現れている場所といえます。水を協力して守りつづけるという目的に、高度成長期に造成された都市という仕組みが、適応しなくなっているのです。

人間は暮らししていくために環境に適応し、それが生活に影響を与えという循環を繰り返すわけですが、「里山」に見られるような生活と自然環境の調和が見られた昔と異なり、現代は私たちのライフスタイルも変化しています。高度成長ならぬ持続的成長が望まれる中で、水を守り続けるための代替システムが、いまだ明確になってはいません。

したがって、問題は「高度経済成長以前の自然と社会の理想」と「現代」の断絶、あるいは「自然環境」と「暮らし」の分断にあるではありません。そうではなく、「水を守り続ける」システムとして、各時代の条件に人間が適応し生活を変えてきたプロセスの中で、現代と将来像が見えないことに問題があると、当センターでは考えています。

このような意味での「水を守り続ける」ためのシステムを、図で表すと次ページの図のようになるのではないのでしょうか。



II. 共同研究「里川」

今年度のテーマ群

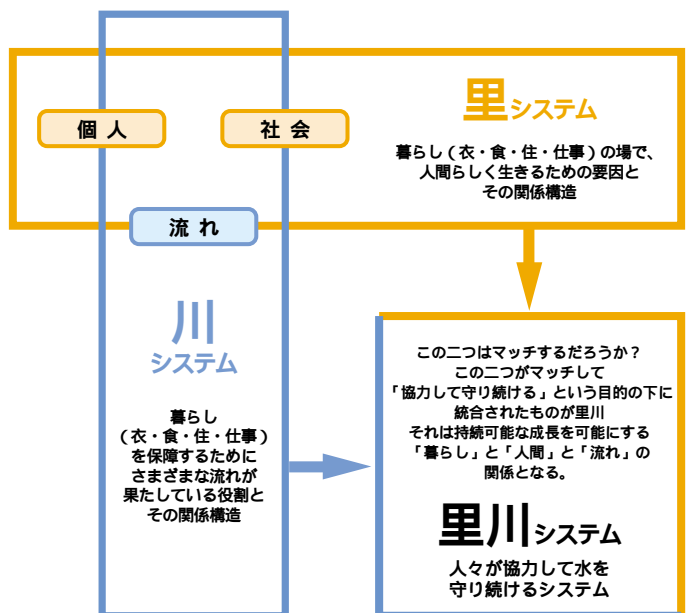
1. 阿久比川（愛知県）マップの作成
2. 神田川流域から見た都市における住宅と集合住宅の水利用
3. 視点としての『暮らしの水利用』
20世紀東京における生活社会史から見る
水利用者の意思決定構造の変遷
4. なつかしい阿木川（岐阜県）
5. 知多半島阿久比川水系における生態学的
景観の変容と周辺住民の生活史との関わり
6. 自然再生推進法と近自然工法
そして里川に接点はあるか？
7. 心象風景『里川』を形作る
『華』と『器』についての現状認識
8. 工業用水の水利用
9. 都市の水辺空間活性化の方法
10. 半田運河（愛知県）の利用変遷と、
人が抱く水辺への魅力を探る
11. 都心のビルに勤務するOLの水意識を探る
12. 都市生活を維持する共有資源としての水
を管理するシステムとして上下水道技術は
適切か 東京都の上下水道史のケース
13. 「雨水利用」、「中水」から
現代「里川」の視点を探る
14. 実験的な水利用住宅から見る、
家の中、意識の中の里川

以上のようなテーマ群から、どのような里川像が生まれてくるのでしょうか。今年度末の報告に向けて、調査・研究を進めてまいります。

「あなたの里川」情報をお寄せください。

お手数ですがファックス、
またはホームページのお問い合わせ欄をご利用ください

FAX : 03-5762-0246
<http://www.mizu.gr.jp/>



川システム、里システムは、従来からそれぞれ単独で論議されてきました。2つのシステムをつなぎ再構成することが「現代に適合した里川」づくりにとって重要ではないかと考えました。個別研究では、川システムと里システムを統合させる具体的な提案を目指して、川にかかわるさまざまな価値意識や社会関係を調査していきます。

